

研究主題「言葉や表現の工夫に着目して作品を読み深め、語彙力を高める指導法の工夫 —文学的文章を通して語彙の量と質を向上させ、表現力を高める学習過程の構築—

東京都教職員研修センター研修部教育開発課
渋谷区立幡代小学校 主任教諭 平間 詩乃

第1 研究のねらい

私はこれまで、単語だけで気持ちを伝えようとしたり、気持ちの詳細は語らずに多義的な言葉で済ませてしまったりする児童に接してきた。言葉が足りないことで意思疎通がうまくいかない児童がおり、児童の語彙力を高める指導の必要性を感じてきた。平成28年12月21日の中央教育審議会答申でも、「小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがある」との指摘があった。語彙の量を増やし、表現力を高め、思いや考えを伝えるのに適切な言葉を生活の中で活用できるように指導の改善・充実を図ることが重要である。

このように、子供が使う言葉や教師の指導の必要性、教育の動向を踏まえ、言葉に興味・関心を持ち、言葉を的確に理解して、思いや考えを適切な言葉で表現できる児童を育てたいと考えた。そのためには、子供たちの語彙の量を増やし、適切な言葉で表現する力を高めるための手だてを講じる必要性を感じた。そこで本研究では、文学的文章を通して語彙の量と質を向上させ、表現力を高める学習過程及び子供たちの語彙力を高める指導法を開発する。

第2 研究仮説

言葉の意味や使い方を理解し、自分自身の言葉を吟味する活動等、語彙力を高めるための手だてを意図的・計画的に学習過程に取り入れていけば、児童の言葉に対する興味・関心が高まり、適切な言葉や表現を使って思いや考えを伝えることができるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

小学校学習指導要領における「語彙指導」に関する取扱いについて、その変遷を調べると、「語彙を豊かにする」という言葉は、学習指導要領（昭和22年）にすでに見られ、このことから語彙力は国語科の根本の力であると考えられる。現行の小学校学習指導要領からは「語句の量を増し、使う」という言葉が明記され、実生活で生きて働く能力を身に付けることが強調された。さらに、新小学校学習指導要領（平成29年3月告示）では「語彙指導の改善・充実を図る」ことが求められている。

「語彙力」について文献で調べると、「言葉を数多く知っていること。言葉を数多く使えること。」と定義されていた。また、同じ文献から、「語彙指導」の方法は右の10の側面に注意することが大切であることが分かった（表1）。

検証授業では、教材研究を踏まえ、①、⑨及び⑩を重点的に指導することにした。そして、習得した語彙を表現する方法として「感想文」を取り入れた。

表1 語彙指導の方法

①	意味	⑥	語種
②	文法	⑦	位相
③	音韻	⑧	語の組立て方
④	表記	⑨	類義語
⑤	語源	⑩	対義語

出典「国語教育研究大辞典」国語教育研究所
明治図書 平成3年

2 調査研究

平成 29 年 7 月、都内公立小学校の教師（10 地区・10 校・150 名）を対象に、児童が使う言葉や言語環境の実態に関する意識調査を質問紙法により行った。

「高学年の語彙の量」について質問をしたところ、児童の語彙の量が「多いと思う」もしくは「どちらかというとも多いと思う」と答えた教師（A 群）は約 36.0%、「どちらかというとも少ないと思う」もしくは「少ないと思う」と答えた教師（B 群）は約 63.3%であった（図 1）。また、「高学年の児童は、言葉を通して自分の思いや考えを伝えられていると思いますか」という質問に対して A 群の約 81.5%、B 群の約 35.8%の教師は肯定的な回答であった（図 2）。このことから、状況に合う適切な言葉を使えることと言葉を知っていることには関連があると考えた。高学年の児童においても、語彙の量と質には課題があるといえる。

3 開発研究

(1) 語彙力を高める手だて

前出の「語彙指導の方法」における 10 の側面のうち、教材の特性に合わせて、手だて 1「意味調べ」、手だて 2「類義語」、手だて 3「対義語」を取り入れた。さらに手だて 4 に表現活動として「文字数を制限した感想文を書くこと」を行うこととし、語彙力を高める手だてとした（図 3）。

(2) 語彙の量と質を向上させ、表現力を高める学習過程

上記(1)の手だてを学習過程の中で意図的に取り入れ、語彙の量と質を向上させ、表現力を高める学習過程を開発した（図 4）。

例えば手だて 1 の「意味調べ」は、第一次で「意味調べ」の仕方を確認しておくことで、第二次や第三次でも調べたい言葉が出てきた時には随時調べることができるようにした。手だて 2「類義語」や手だて 3「対義語」は第二次の本文の読み取りの際に取り入れると語彙を増やすのに効果的であると考えた。手だて 4「感想文」は第一次と第三次に取り入れることで、児童も教師も学習の深まりを確認できると考えた。教材の特性に合わせて手だてを取り入れる段階を整理した。

授業では、児童が必要なおきにはいつでも辞書が手元にあり、使えるような言語環境を整えた。

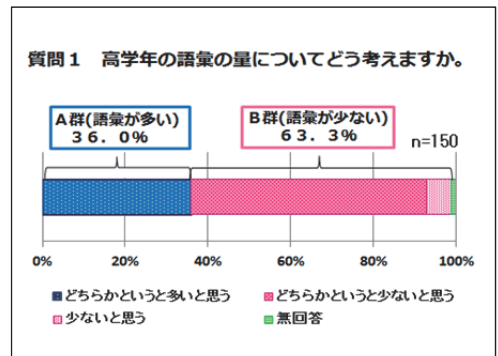


図 1 高学年の語彙の量

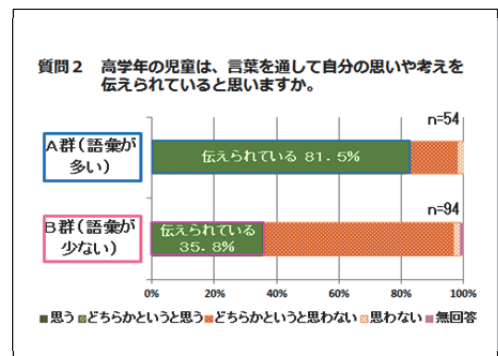


図 2 高学年の児童は、言葉を通して自分の思いや考えを伝えられているか

児童の語彙力を高める手だて

- 【手だて 1】・・・「意味調べ」において、「辞書的意味」を押さえて語彙を増やす。
- 【手だて 2】・・・「類義語」に置き換える活動を通して適切な言葉を選ぶ力を高める。
- 【手だて 3】・・・「対義語」を押さえることによって、語彙を増やす。
- 【手だて 4】・・・感想文の「文字数を制限」することで、言葉を吟味する力を高める。

図 3 児童の語彙力を高める手だて

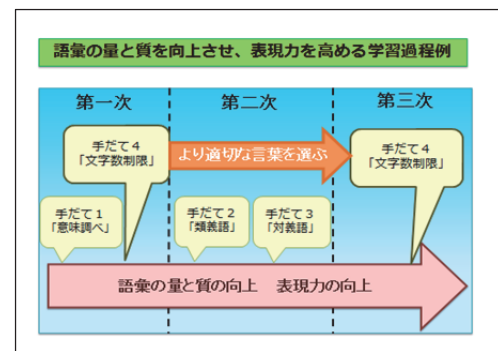


図 4 語彙の量と質を向上させ、表現力を高める学習過程例

4 検証授業

(1) 授業の概要

表 2 検証授業の概要

平成 29 年 9・10 月、都内公立小学校第 6 学年の児童を対象に検証授業を実施した。文学的文章は、児童が教材に興味をもちやすい。さらに、作者は語句や表現方法に意図や工夫を込めているため、児童が作者の意図を探る過程で語句の意味を調べ、理解する姿が期待できる。言葉の意味を理解したり自分自身の言葉を吟味したりするを通して、作品の主題を捉えられると考えた(表 2)。

検証の目的	・言葉の意味を理解したり自分自身の言葉を吟味したりする活動を通して、児童の言葉に対する興味・関心を高めることをねらいとする。 ・児童の語彙力を高める指導の工夫及び学習過程の工夫について検証する。
対象	都内公立小学校第 6 学年児童 (2 学級・76 名)
教材	「その日、ぼくが考えたこと」重松 清 作 (学校図書・6 年下)
単元名	作者のメッセージを受け取ろう (全 5 時間)
単元の目標	言葉や表現に着目して読むことを通して言葉の使い方に対する理解を深め、作品の主題を捉えることができる。

(2) 手だてを講じたことによる児童の思考の深まり

手だて 1～3 では、作品の主題につながるキーワードでもある「幸せ」について、辞書で定義される意味(辞書の意味)と、文脈で表される意味(文脈の意味)の両側面から言葉の意味を推察した。また、児童は類義語や対義語を調べるを通して語彙を増やし、言葉の使い方を理解した。毎時間の授業のまとめの時間に書いた児童の学習感想に着目し、手だてを講じたことによる学習の深まりを分析した。以下は、具体的な分析例である。

ア 対義語に着目することで主題を捉えることができた A 児

A 児は、言葉の意味を理解することで、登場人物の心情を捉えられるようになった(図 5)。主題につながる重要語句や難語句を取り上げることで、物語の内容を理解することにつながる。

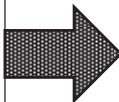
・一つ一つの言葉の意味をより詳しく知り、理解すること、ヒロキの心情も伝わってきた。(第 2 時)
 ・一つ一つの言葉の表現の奥深さが初めて理解できた。ヒロキのように人の幸せも考えられる人になりたいたし、幸せと感ずるようにしたいと思った。(第 4 時)

図 5 A 児の学習感想

また、A 児は、第 1 時で幸せについての考えを両親の言葉やテレビから学んだことでまとめており、自分の考えに対して確信がもてていなかった(図 6)。しかし、第 5 時には学習を通して幸せについての考えをもち、最後に「伝えたい」という言葉でまとめ、自分の考えを発信するまでに至った。手だて 3 (対義語)における「不幸」の捉えがあったからこそ、A 児は「幸せ」の意味を見だし、自分が使う言葉に確信をもつことができたことで、適切な言葉を選んで表現できるようになった(図 7)。

私の思う幸せは毎日生きら
 れるといふことだと思いま
 す。それは貧しい国の人が
 テレビで映されたり、両親
 にも言われたりしたこと(略)

図 6 A 児の感想文 (第 1 時)



私はこの学習をして自分に
 とつての幸せや不幸を考え
 るようになった。でも、人
 による幸せと感ずる時は
 違ふ。感ずる事でも違うと知
 った。つまり私にとつて幸
 せと感ずる事は他の人から
 見れば何の意味もない事な
 のかもしれない。そして、
 私にとつての幸せ、生きて
 いく上で大切な事だと思
 います。私にとつての幸
 せは生きていく上で大切な
 のだと思えること、そして
 は生きていく上で大切な事
 だと思えること、そして
 しなれないこと、そして
 と伝えたい。

図 7 A 児の感想文 (第 5 時)

イ 言葉の意味に着目することで主題を捉えることができたB児

B児は、辞書を活用したことで、言葉の意味や使い方が理解できた。さらに、自分自身の「幸せ」について考えをもち始めている。また、「より伝えやすくする言葉」という感想から、言葉に対する興味・関心が高まっていることが分かる(図8)。幸せという言葉に着目して、作品を読み進めたことにより、B児は作品の主題を捉え、幸せに対して新たに考えをもつことができた(図9及び図10)。

少しの意味の違いでも、より伝えやすくするためには色々な使い方があり、知りました。ぼくの考えている幸せも変わっていることに気付いて良かったです。(第2時)

幸せというのが一瞬一瞬で変わったりするのは共感しました。それが人によって様々なものだと思うと壮大なものだと改めて感じます。辞書では「幸せ」とは十分満足なこととあつたけれど、少し違う気がします。(第4時)

図8 B児の学習感想

僕が考える幸せとは、時間の中で精一杯楽しむことだ。ここでいう時間は一日一日ではなく、一生の間のこと。また、精一杯楽しむためには、必ず不幸がなければそれは相対的に見て幸せで楽しいと言えない。つまり、辛いことの中に後にある楽しみという希望を見いだすことが幸せにつながるのだ。楽しいことだけではそれが普通になっただけで、だから普通になっただけで僕なりの幸せの時だと思う。

図9 B児の感想文(第1時)

この文章を読んだ直後、不幸がないと幸せはないと思っていた。しかし、考えが変わった。全ての人は幸せな時があるのだと思う。アフリカの女の子やシュータ君の最期のように、つらくなることはあるけれど、本文にあったようにそんなのは一瞬一瞬で変わるのだと気付いた。でも、これは当然だった。また、シュータ君の死や、最後の一言「誕生日」にこめられているように、生きていること自体が幸せなのかもしれない。

図10 B児の感想文(第5時)

第4 研究の成果

言葉の意味や使い方を理解する活動を通して、登場人物の心情や作品の内容を読み取ることにつながり、作品の主題を捉えるという単元の目標を達成することができた。また、自分自身の言葉を吟味する活動を通して、自分が使う言葉に確信をもち、適切な言葉を選んで表現できた。児童の言葉に対する興味・関心が高まり、適切な言葉を使って自分の思いや考えを伝える姿につながった。

以上のように、文学的文章において、語彙力を高める手だてを意図的・計画的に学習過程に取り入れたことは、児童が言葉や表現の工夫に着目して作品を読み深め、語彙力を高めることに有効であることが確認できた。

第5 今後の課題

- ・ 検証授業では「語彙力を高める手だて」を四つ講じたが、手だての数や取り入れる手だてを変えることで、研究を発展させていく。
- ・ 物語文以外の文章等(説明的文章・詩・短歌や俳句等)や学年、教科を越えても開発した手だてや学習過程を活用していき、本研究の汎用性を高めていく。